

私たちは皆、神の国の相続人になりたいと願いつつ信仰の歩みをしています。パウロは6章で「神の国」と言う国を受け継ぐには、普段の生活から身を慎んでふさわしい生活をしなければならないと教えます。たとえで言うと、国王の子どもである皇太子は子供の頃から帝王学を学び、羽目を外すと側近から「王子様はそんなことをしてはいけません」といさめられて、身を慎しむことを教えられるそうです。それとよく似ています。神の国に入るには、ふさわしく節制しなさい、と教えています。

しかし、「神の国」って一体どのような国でしょうか。神の国は争いもなく、平穏であり平和で憎しみも悲しみもなく喜び一杯の国が「神の国」でしょうか。少し違うようですね。皆さん方もご存じだと思いますが、教会は「神の国」の写しです。神の国そのものではないのです。ドイツのカール・バルトという牧師・神学者が、ある本で述べています。「どんな荒れた教会でも、礼拝で聖礼典が行われ、洗礼式や聖餐式が守られていれば、そこは教会であり、「神の国」の写しである」とありました。それを読んで安心したことを覚えています。コリントの教会も揺れ動いている教会でした。日本の教会ではここまではあまりないのではないのでしょうか。というのも、コリントは様々な人種の方々が住んでいるので裁判沙汰が多いのです。特にギリシャ人は個人的なごたごたをすぐ法廷に持ち込んで解決を図る傾向があるということです。これにパウロは反対したのです。1節で「あなたがたの間で、一人が仲間の者と争いを起こした時、聖なる者たちに訴え出ないで、正しくない人々に訴え出るようなことを、なぜするのです」と言っています。それほど問題でないつまらない騒ぎをなぜ、法廷にもっていくのかと首をかしげます。どのような騒ぎなのかはここで明らかにされてはいないのでわかりませんが、外の社会に持っていくこと自体が教会の恥をさらすようなもので、もう既に教会の負けだと言います。そうですね、教会の証が出来ないからです。世間から「あんところか」と言われてしまうでしょう。教会はいいことばかり言って、愛だとか赦しだとか言っておきながら、実際はわたしたちと変わらないのだと思われるのです。パウロによると世俗の裁判官は律法を知らない者であり、神を信じない者で正しくない者、異邦人であると考えました。そのような者に訴えても正しい裁きが出来ないわけはないと考えたのです。それは当たり前です。教会の事情を知らない人がなぜ正しい裁き出来るでしょう。

パウロは7節で教えています。「そもそも、あなたがたの間に裁判ぎたがあること自体、既にあなたがたの負けです。なぜ、むしろ不義を甘んじて受けないのです。なぜ、むしろ奪われるままでいいのです」と言います。不義というのはどのようなことでしょうか。不義の元々の意味は義理、道理に背くことです。道理に背くことをなぜ受けないのか、教会員同士互いに騙されたと思って訴えたら、もうそれで負けだと言います。両方が同じ程度になっ

てしまうからです。お互いがみ合ったら、同類になってしまいタヌキと狐の化かし合いになってちがいが明かなくなり泥仕合いになるのです。そこをパウロは心配しました。パウロは根本的なことを教えました。なぜ、むしろ不義を甘んじて受けないのです。なぜ、むしろ奪われるままでいないのです、主は低くなられ高いところから降りてこられたのに、と問いました。クリスマスは降誕節といいますね。天から主は降りてこられたのです。神の身分でありながら降りてこられて地上で生を受けられました。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」とコリントの第二の手紙8章9節で教えています。主は貧しくなられたのに、あなたがたは兄弟に対して奪い取っている、と言います。結局お互いが傲慢になり相手より高いところにおり、謙虚でなくなっている。主の貧しさを覚えなさいと正したのです。

9節を読むと「正しくない者が神の国を受け継げないことを、知らないのですか。」と言います。「思い違いをしてはいけません。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通するもの、男娼、男色をする者、泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、人の物を奪う者は、決して神の国を受け継ぐことは出来ません」とはっきり宣言します。このリストは救われるか否かの分水嶺なのです。クリスチャンと町の人たちの分水嶺なのです。分水嶺とは、降った雨水が、山の背をはさんで川となって反対の方向に流れることです。山の頂と頂を結んで続いている一番高い部分の連なりを挟んで川となって反対方向に流れること。このリストを守れるか守れないかによってパウロはその人を判断したのです。ローマ文化は廃退していました。特に貴族たちの生活はひどいものでした。男娼や男色は何でしょう。同性愛でしょうか。パウロの時代は厳しい時代でしたけど、あれから約2000年の月日が流れました。今ではアメリカでは男と男とが結婚することが州で認められている時代になりました。ですから時代考証をしなければなりません。以上のリストが分水嶺となって救いの川に行く人、あるいは反対方向の川に行く人に分かれるのです。私たちはどうでしょうか。ご自分の胸に手を当てて考えてみてください。コリント書より少し後に執筆された手紙に「エフェソの信徒への手紙」があります。その手紙にはこのように書かれています。「この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです」とあります。ここに保証とあります。保証というのは手付金を意味するのです。商売をして契約をした時、全額の内の幾らかを払います。手付金を払うと必ず買いますから、という意思表示になるのですね。購入しないと手付金は戻らないのです。ですから、このようにも考えられます。わたしたちに手付金である聖霊を与えられた神は、私たちに「神の国」を継がせることを保証してくださるだけでなく、神の国の一部を先払いしてくださり、「神の国」を今から先取りして味わわせてくださるのです。ですから、昔の自分とは違って、今は、罪から洗われ全部ではないにしろ、清められ義とされたキリスト者は、聖霊において、神の国の香りと味わいとが漂ってはいなくてはならないはずで、11節にあるように、「あなたがたの中にはそのような者もいました。しかし、主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされ

ています。」だから、あやまちをしないで歩みましょう、とお勧めをしています。振りかえってみると、人と口論する場合、自分は100%正しいと思いがちですけど、やはり欠けはあるのです。でもそれが見えないのです。お互いがそう思っているのです。私は昔のことを思い出して考えることがあるのですが、やはり、謙遜でなかったと思いました。どこかで傲慢な自分があるのです。信仰に熱心な人ほどそうなるのです。そして、人の粗（あら）は見えやすいけど、自分の粗は見えにくいのです。イエスさまが言われています。「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか」と言われました。本当に、他人の小さな欠点に見えるのに、自分の大きな欠点は見過ごしやすいです。でも自分のことは一番良く知っているはずなのに見えないのです。

パウロはさらに進めます。パウロは12節で不思議なことを言います。『わたしには、すべてのことが許されている。』しかし、すべてのことが益になるわけではない。「わたしには、すべてのことが許されている。』しかし、わたしは何事にも支配されはしない。』という言葉です。どのような意味でしょうか。疑問ですね。この言葉は10章23節にも繰り返されています。『すべてのことが許されている。』しかし、すべてのことが益になるわけではない。「すべてのことが許されている。』しかし、すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではない。』という言葉です。パウロはキリスト者の自由や律法からの解放を教えた使徒でした。しかし、クリスチャンたちはその言葉を曲解する人もいたのです。パウロの教える自由は何でもしていい、という自由ではなく、規律がある。そうでなければただの放縦でありわがままであり、勝手気ままな自己満足だ、と言います。そして、すべてが益になるわけではなく、と言います。益になるとは愛の行為を指しています。すべての行為が愛の行為になるわけではない、と言います。良かれと思ってしたことが裏目に出たりします。愛の行為がすべて報われるというわけではない。クリスチャンは今までの習慣や生き方に支配されやすいけれど、信仰はそれらを支配する力を与えてくれる。それ故、クリスチャンは悪い習慣を支配する支配者となることが出来る、と教えます。このずっと後に「ヨハネの黙示録」が執筆されました。この書は使徒ヨハネがイエス・キリストの黙示、黙示とはイエスさまが暗黙の内に御心を使徒ヨハネに告げたことを言うのですが、イエスさまが僕ヨハネにお伝えになったものです。この手紙には7つの教会に宛てた手紙があり、エフェソの教会にも宛てています。その手紙には、エフェソの教会は、初めは良かったけれど、段々愛が冷えていってしまった。だから、どこから落ちたかを思い出して悔い改めて初めの頃に戻りなさい。でなければ、あなたの燭台をその場所から取り除いてしまう。と言っています。燭台を取り除くとは説教が聞かれなくなる、使徒たちがいなくなる、巡回しなくなるという恐ろしい事態が起こることなのです。コリントの教会も今まさにそのような危機に陥っているのです。パウロはコリントのクリスチャンたちに覚醒しなさいと教えます。なぜならあなた方の体は聖霊が宿ってくださる神殿だから、そして、神が代価を払ってあなた方を買収されたから

早く目覚めなさい、と強く悔い改めを勧めています。パウロの発想は驚きです。私たちの体が神殿とは。しかも、聖霊が宿ってくださる神殿です、という言い方。パウロらしいですね。だとしたら私たちの神殿はあの豪華絢爛なソロモンの神殿ではなく、質素な神殿ですけど聖霊が宿ってくださるよう、大掃除をしてこのアドベントの時を迎えたいと思います。

昨日は正教師の按手礼式に行ってきました。埼玉地区では越生教会の佐藤彰子先生、埼玉大通り教会の稲益久仁子先生が受けられました。また、時代を感じたのは2つの教会を兼務している先生がおられたことです。代務者ではなく2つの教会を主任として兼務されていることです。少子高齢化やコロナの関係でこれからそのような教会・伝道所が増えるかもしれません。

「神の国の相続人」として、身を慎みながら歩ませていただきたいと思います。